

イリヤは、若いころから年をとるまで、果てしない荒野こうやを駆けめぐり、ロシアを敵の手から守つて来ました。

イリヤには、ブルーシカというすばらしい馬がいました。ブルーシカは長いたてがみをなびかせて、ひと蹴りで川を飛びこえ、何度もイリヤを助けました。

あるときのこと。イリヤは、ブルーシカとともに、ロシアの荒野を旅していました。もう年老いて、髪もあごひげも白くなっていました。

「ああ、老いよ。おまえは、この荒野でおれをとらえた。黒いからすとなつて、おれにおそいかかった。おお、若さよ。そなたは、はやぶさとなつて、おれから飛び去つてしまったのか」

イリヤは、道が三つに分かれている所にさしかかりました。そこに、白い石がひとつ横たわつていて、こう書いてありました。

《右に進めば殺され、左に進めば富を得、まっすぐに進めば妻を得る》

イリヤは、しばらく考えました。

「この年とつたおれが富を得てなんになる。喜ばせる家族はいないし、財産を分けてやる相手もない。それに、この年とつたおれが妻を得てなんになる。まあ、殺されるといふ道に進んでみるか。勇士ゆうしとして、りっぱに死のうではないか」

イリヤは、殺されるという右の道に馬を進めていきました。

しばらく行つたところで、とつぜん、四十人の盗賊がイリヤにおそいかかつて来ました。イリヤを馬から引きずり下ろして打ち殺そうとしました。イリヤはさげばしました。

「このおれを殺しても、盗るものは何もないぞ。おれの持っているものといえば、てんの毛皮に黒てんの帽子、馬勒ばろくにくら、黄金と真珠をぬいとりした馬衣ばいだけだ。それと、ブルーシカの耳の間に宝石がひとつ。これは秋の夜には太陽のごとく輝き、はるかかなたまで明るく照らす。そう、それから、ブルーシカだ。この馬には値あたがつけれまい。たつたこれだけのために、この年寄りの頭を切つて落とそうというのか」

盗賊の頭かしらは、腹を立ててさげばしました。

「こいつ、おれたちを笑いものにしやがる。やつの頭を切り落としてしまえ」

イリヤは、ブルーシカからさつと飛び下りて、白髪頭から帽子をつかんで、ふり回し

ました。こちらにふれば道が一本できあがり、あちらにふれば辻つじができました。ひとふりで盗賊十人が倒れ、もうひとふりで、二十人が倒れました。

盗賊の頭は、

「勇士よ。命ばかりはお助けください。金銀、着物や馬をさしあげますから」とあやまりました。イリヤは、

「もしおれが、だれかれなく金銀を取り上げていたら、おれの蔵は今頃いっぱいになっている。着物を取り上げていたら、おれの背中に着物が山になっているだろう。馬を取り上げていたら、後ろに馬の群れを従えていなくてはならん」といいました。すると、盗賊の頭がいました。

「この世に赤い太陽がただひとつであるように、あなたのような勇士はロシアにただひとりです。わたしたちの頭になってください」

「おれは、おまえたちの仲間にはならない。おまえたちも、罪のない者の血を流すのはもうやめろ。妻や子の待つ故郷の家に帰ることだ」

そういつて、イリヤは駆け去りました。

イリヤは、白い石の所にもどると、文字を消して新しくこう書きました。

《右の道に進んだが、殺されはしなかった》

「さて、今度は、妻を得るといふ道に進んでみよう」

たいして行かないうちに、イリヤは野原に出ました。そこに、金の屋根の御殿が立っていて、銀の門が大きく開かれ、門の上では鶏がときを作っていました。イリヤが広い中庭に馬を乗り入れると、十二人の乙女おとめが、イリヤをむかえにとび出して来ました。その中に美しい王女がひとりいました。王女は、

「ようこそお越しく下さいました。甘いぶどう酒やパン、焼いた白鳥をごちそうしましょう」といいました。そして、イリヤの手を取って御殿の中に引き入れてテーブルに着かせました。

イリヤがたっぷり食べ終わると、王女は、

「どうぞゆっくりにお休みください」といつて、羽根ぶとんのベッドに連れて行きました。

イリヤは、

「このもてなしはただ事ではないぞ」と考えました。そして、金の花が描かれたベッドを見るなり、王女をつかまえてベッドに投げつけました。ベッドはひっくり返って、石

造りの穴蔵あなぐらがぱつくりと口を開けました。王女は穴蔵にころげ落ちて行きました。

「おい、だれか穴蔵のかぎを持つて来い」と、イリヤがさけぶと、召使いたちは、

「かぎのありかは存じません。が、穴蔵に通じる道をお教えしましょう」といって、地下の奥深くへ案内しました。

イリヤは、穴蔵のとびらをけ破りました。そこには、四十人の王と王子、四十人の皇帝と皇子、四十人のロシアの勇士が閉じこめられていました。イリヤはいいました。

「あなたがたは、ご自分の土地にお帰りください。そして、あなたがたを救い出したこのイリヤのことを忘れないでください」

それから、王女の髪をつかんで引きずり出して、頭を切り落としました。

イリヤは、白い石の所にもどると、文字を消して、新しくこう書きました。

《まっすぐ進んでみたが、妻を得ることはなかった》

「さて、今度は、富を得るといふ道に進んでみよう」

しばらく行くと、重さが五トンもある大きな石に出くわしました。その石には、

「この石を動かすことのできる者は富を得る」と書かれてありました。イリヤは、満身の力をこめて、ぐいと押しました。すると、石はひっくり返りました。石の下に穴蔵があつて、そこには、数えきれないほどの宝物と、金銀、真珠、サファイヤが入っていました。

イリヤは、宝物をブルーシカに積みあげて、キエフの都に向かいました。宝物を売ったお金で、イリヤは、敵にも火にも強い石の教会を三つ建てました。そして、残りの金銀、真珠、サファイヤは、貧しい母親や親のない子どもたちに分けあたえて、自分の手元には一文も残しませんでした。

イリヤは、ブルーシカにまたがって、白い石の所にもどると、古い文字を消して、新しくこう書きました。

《左の道に進んだが、富を得ることはなかった》

そのかわり、イリヤには、永遠の栄光と名誉があたえられました。

このはなしは、これでおしまい

村上郁 再話